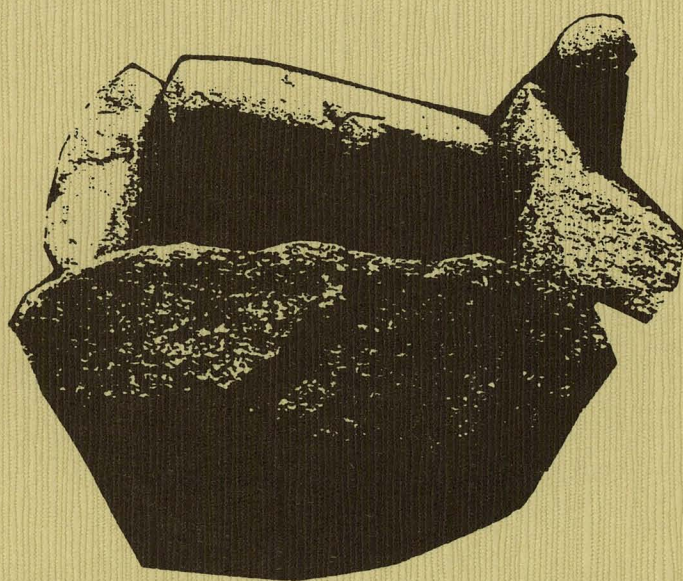


友部町埋蔵文化財調査報告

橋爪遺跡 A地点 (原遺跡)



平成 6 年 4 月

西茨城郡友部町教育委員会

例 言

- 1 本報告書は、友部町大字橋爪字原942-2に所在する、橋爪遺跡A地点（原遺跡）の調査報告書である。

「今回の調査は、橋爪遺跡全域の調査でなく一極部の調査であるため、便宜上A地点（原遺跡）とした。」

- 2 調査は、稲野辺三郎氏外の宅地造成に伴う、開発行為のため行った緊急調査である。
- 3 調査は、友部町教育委員会が主体となり、萩原義照が担当したもので、平成6年3月10日から15日まで行った。
- 4 調査に際しては、教育委員会社会教育課柏崎課長、同文化財担当職員のご協力を戴いた。また町文化財保護審議会々長、同小谷・檜山委員さんの積極的な応援と、稲野辺氏・大和田設計事務所のご奉仕により、無事終了できましたことにたいしここに特記し謝意を表す。

目 次

例 言

1	遺跡と周辺環境	1
(1)	遺跡の概観	2
(2)	町内の縄文遺跡	2
(3)	橋爪遺跡の性格	2
2	調査の概要	2
3	遺 構	4
(1)	石組炉	4
4	遺 物	5
(1)	土 器	11
(2)	石 器	12
	むすび	13

挿 入 目 次

第1図	橋爪遺跡及びA地点の位置図	
第2図	友部町縄文遺跡分布図	1
第3図	宅地造成地と調査区	3
第4図	調査区トレンチ設定と遺構検出部	3
第5図	石組炉実測図	4
第6図	把手実測図	5
第7図	土製円板拓影図	6
第8図	出土土器拓影図	7
第9図	出土土器拓影図	8
第10図	出土土器拓影図	9
第11図	出土土器拓影図	10
第12図	石皿実測図	11
第13図	石斧・磨石・敲石・石鏃実測図	12

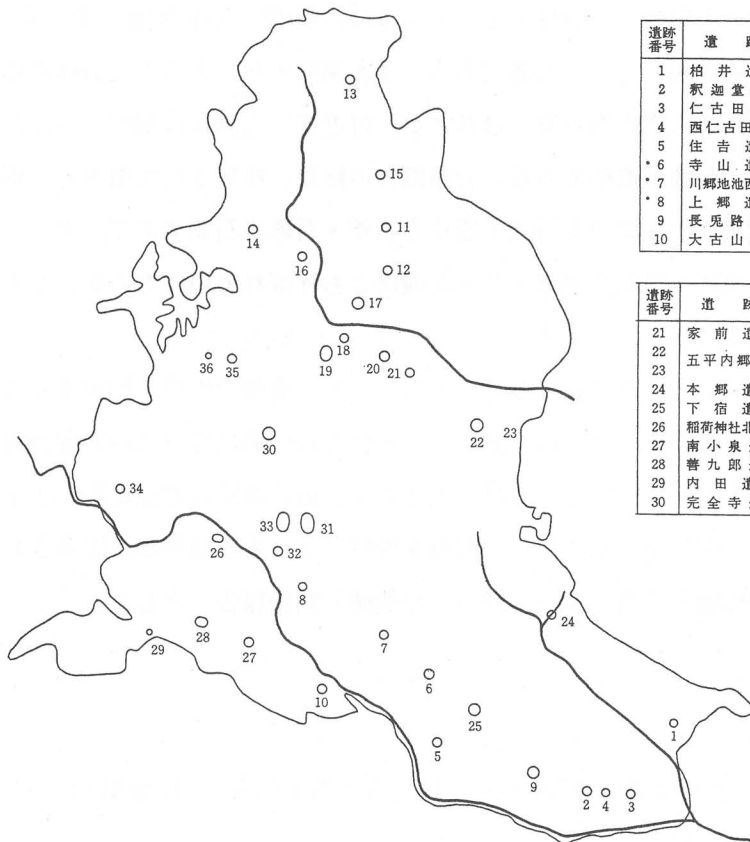


第 1 図 橋爪遺跡及びA地点の位置図 (1 : 15,000)

橋爪遺跡A地点(原遺跡)調査報告

1 遺跡と周辺的环境

友部町は、県のほぼ中央に位置し、北と西は低山地帯を境界として笠間市に、南は湊沼川を隔てて岩間町に、東は平坦な農地や平地林を境にして内原町に、南東の一部は茨城町に接し、東西約11km南北13kmで面積は58.73ha²である。(『友部町史』)。また友部町は、JR常磐線・水戸線が町を横断する交通至便の地である。そのため開発事業も急増し、振興都市として今後ますます発展が期待される。地理的条件に恵まれている。



遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名
1	柏井遺跡	11	坂場遺跡
2	釈迦堂遺跡	12	小原香取遺跡
3	仁古田遺跡	13	山内・金山遺跡
4	西仁古田遺跡	14	撰子池遺跡
5	住吉遺跡	15	柏原遺跡
6	寺山遺跡	16	御城遺跡
7	川郷地池西側遺跡	17	松崎台遺跡
8	上郷遺跡	18	宮前本郷遺跡
9	長見路遺跡	19	久保遺跡
10	大古山遺跡	20	家前遺跡

遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名
21	家前遺跡	31	八幡台遺跡
22	五平内郷遺跡	32	城の内遺跡
23	本郷遺跡	33	橋爪遺跡
24	下宿遺跡	34	星山遺跡
25	稲荷神社北側遺跡	35	北山不動尊遺跡(石山神)
26	南小泉遺跡	36	石山神遺跡
27	善九郎遺跡		
28	内田遺跡		
29	完全寺遺跡		
30			

第2図 友部町縄文遺跡分布図(『友部町史』)

(1) 遺跡の概観

友部町の遺跡の分布を概観してみると、涸沼川前川、涸沼川の両岸及び枝折川の沿岸洪積世台地には、縄文遺跡や古墳時代の遺跡に複合して、弥生の遺跡も点在している。こうした自然環境を背景として、多くの遺跡が存在している。

(2) 町内の縄文遺跡

友部町内の遺跡の分布は、町史編纂室において実施した、分布調査の報告によると、約36か所の縄文遺跡が確認されている。代表的な縄文遺跡として、町史は枝折川の北側台地の柏井遺跡、小原神社周辺の小原遺跡、下市原の松崎台地遺跡橋爪遺跡をあげている。

(3) 橋爪遺跡の性格

本遺跡は、友部町大字橋爪を遺跡名とするように、涸沼川北岸台地一帯から、常磐線両側に広がる範囲の大きい遺跡である。『友部町史』によると、遺跡の範囲はJR常磐線の西から老人憩の家「はなさか」付近で、南側には涸沼川が広がるその先端部までの台地が遺跡である。分布調査の結果、採集された遺物は、縄文中期の加曾利E式や、後期の安行式土器片と石斧・石鏃の石器である。さらにこの遺跡は、城の遺跡・榎の宮遺跡・花さか遺跡とも呼ばれていたものを、まとめて遺跡名を橋爪遺跡としたとある。

この遺跡は、範囲が広いので表採遺物のみによって、遺跡の性格を把握することはできない。今回の調査のように、個人による住宅の建築に伴っての発掘調査であり、遺跡全体からみて極めて小面積であるので、橋爪遺跡A地点とか、小字名の原遺跡として、取り扱った方が、本調査を理解するうえで便利かと思われるので、本報告の標題を「橋爪遺跡A地点（原遺跡）調査報告」とした。

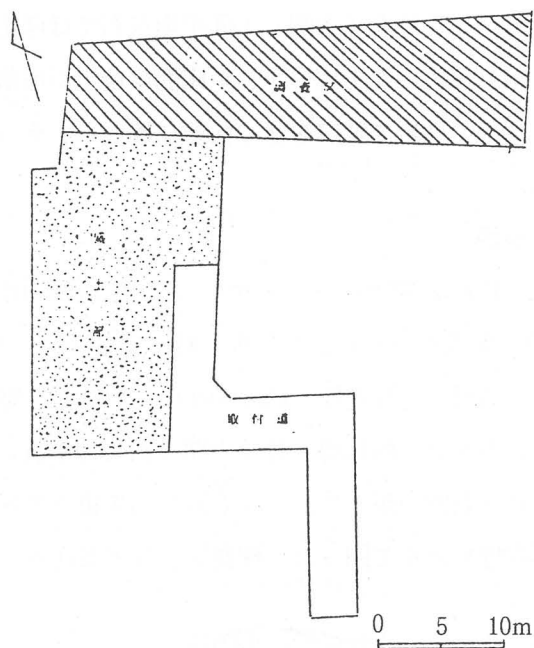
2 調査の概要

宅造に伴う、開発予定地約2,500㎡のうち、盛土部分を除いた旧栗畑約300㎡を調査地として実施した。

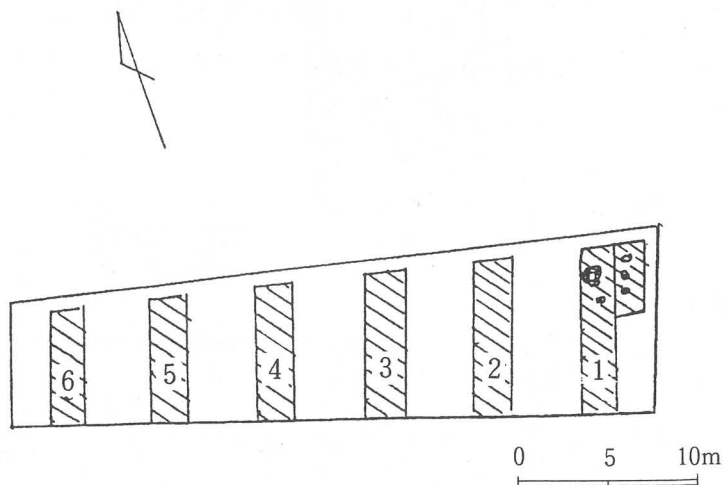
調査は、南北に5～7m長さで、2mのトレンチ6本設定して開始した。その結果第一トレンチ以外は、何等遺構は確認されなかった。第一トレンチの北東隅

にかけて、土層の変化がみとめられ、ここから炉跡の石組が検出された。これが本調査における、唯一の住居跡関連の遺構となった。

また覆土中から縄文土器片が多く出土し、このなかには土器片を利用して作った土製円板7点も含まれている。



第3図 宅地造成地と調査区



第4図 調査区トレンチ設定と遺構検出部

3 遺 構

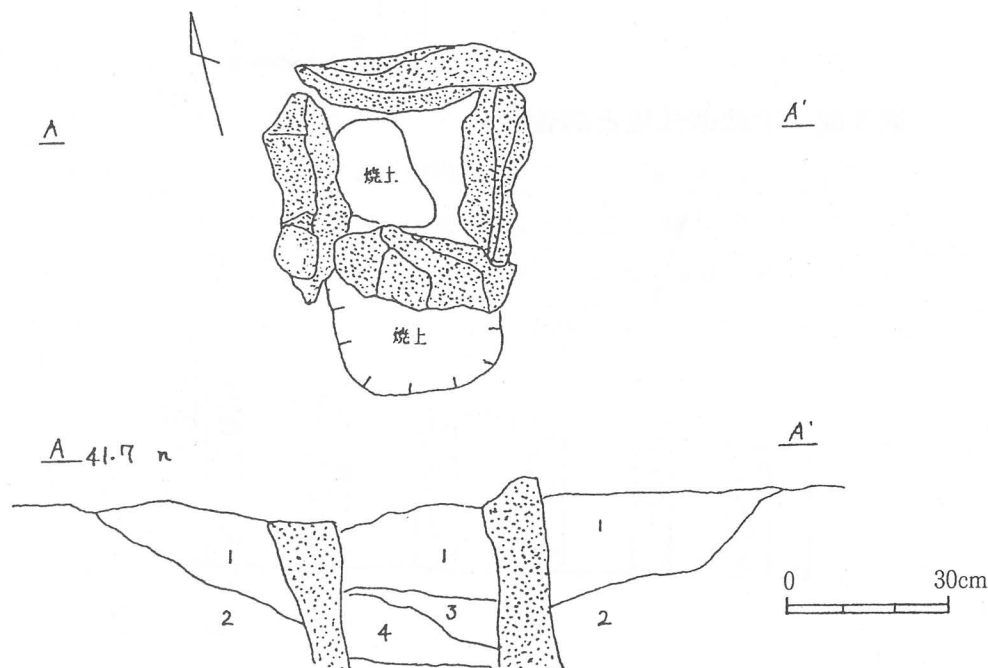
(1) 石 組 炉

第1トレンチ内北東隅の、辺縁部表土下約70cmの位置に確認されたものである。炉の平面形は、一辺が35～45cmの方形を呈し、床面を20cmほど掘り込み、炉の周囲に石で構築したもので、片面（内側）に平坦な石でほぼ正方形に組み込んでいる。炉内には、暗い褐色の焼土粒子が、炉床面は焼土が堆積する。南側の炉石は、巾30cm、高さ10cmの砂岩で焚口を塞ぐ状態に置かれ、その炉石の下と炉外にも焼土がみられる。

* 縄文時代の石組炉

縄文時代早期（約10000年前）までの炉穴は、住居跡の中に炉をつくらず、屋外に1.5m前後の炉穴をつくる、これを一般に「屋外炉」とよんでいる。

屋外に炉をつくる縄文時代前期（約6000年前）以降は、竪穴住居跡内のほぼ中央につくることが多い。特に縄文時代中期（約4000年前）は、炉の周辺に河原石で埋め込んだ「石囲い炉」や、ほぼ方形に石を組んで埋め込んだ「石組炉」また大形の土器片埋め込んで囲った「埋甕炉」などが在る。



第5図 石組炉実測図

- 1 黒褐色（ローム粒子含む）
- 2 明褐色（ロームブロック）
- 3 赤褐色（焼土粒子含む）
- 4 赤土（焼土）

4 遺物

本調査で出土した遺物は、縄文土器片・土製品・石器・石製品であるが、主として第1トレンチ内から出土している。除土作業は、重機を利用したので、出土した遺物を原位置的に関連づけることはできなかった。

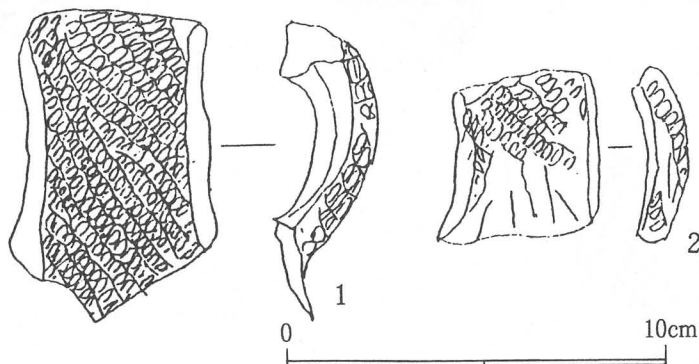
(1) 土器

出土した土器は、縄文時代の加曾利E式期中期後葉のものが主体で、第1トレンチ内から大部分出土した。しかしそのほとんどが破片で接合復元できるものはなかった。器種は、深鉢形土器に推定されるものである。出土した破片はすべて、口縁部無文帯で、その下位に微隆起線文があり、それより下位胴部に、無節の斜行縄文を施文したものである。また同じ口縁部無文帯の下位に微隆起線による、平行的曲線（逆U字状）が描かれ、区画内には、縄文が充填されている。胎土には雲母を多く含んでいるものもある。

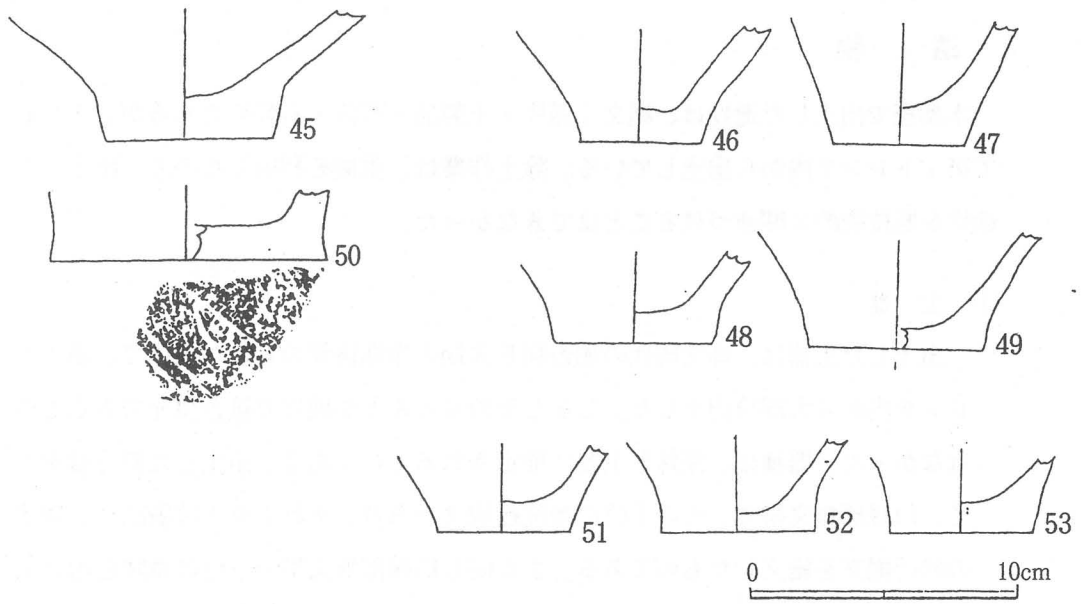
胴部破片についても、口縁部破片と胴器種のもので、大部分が微隆起線による渦文で、その区画内には、斜行縄文が施されてある。

底部破片は、6点出土したが、いずれも平底で、ナデ整形され木葉痕1点ある。そのほか、円筒形の把手が2点出土した。外面に縄文を施した大形土器の把手とみられる。

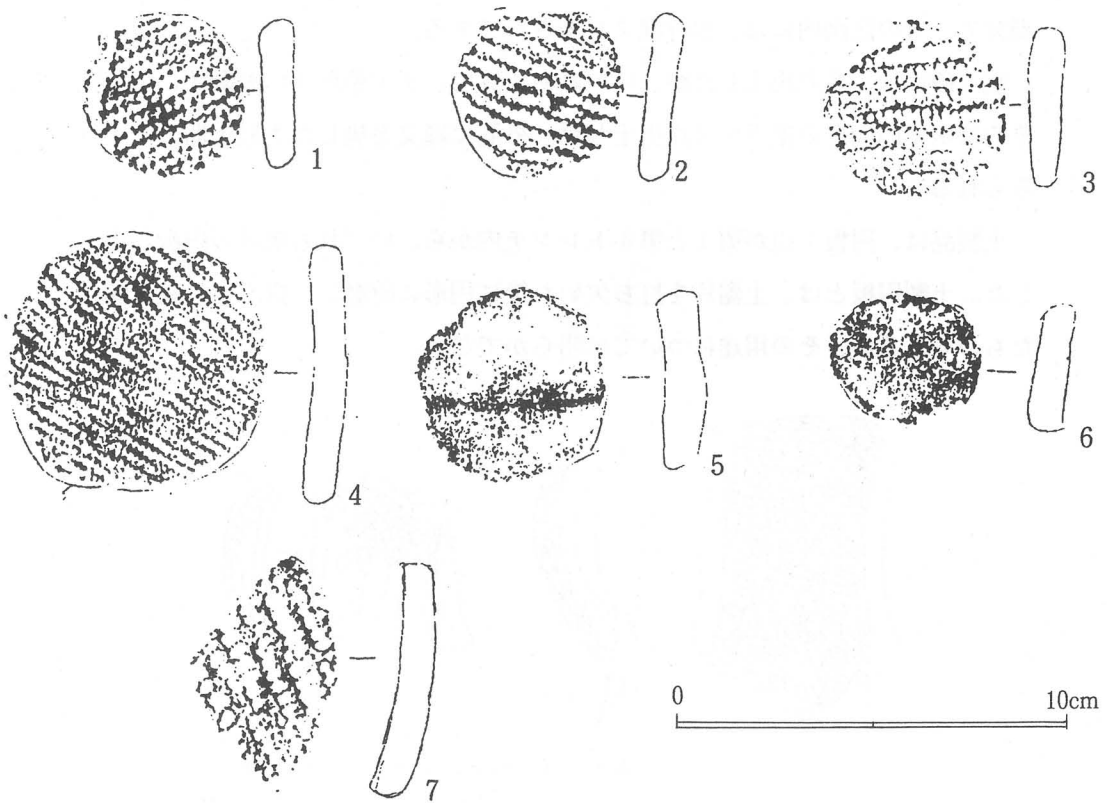
土製品は、円板7点が第1と第4トレンチ内から、いずれも無孔の円板が出土した。土製円板とは、土器片を打ち欠いた後に円形に研磨し、真ん中に孔を開けたものもあるが、その用途については明らかでない。



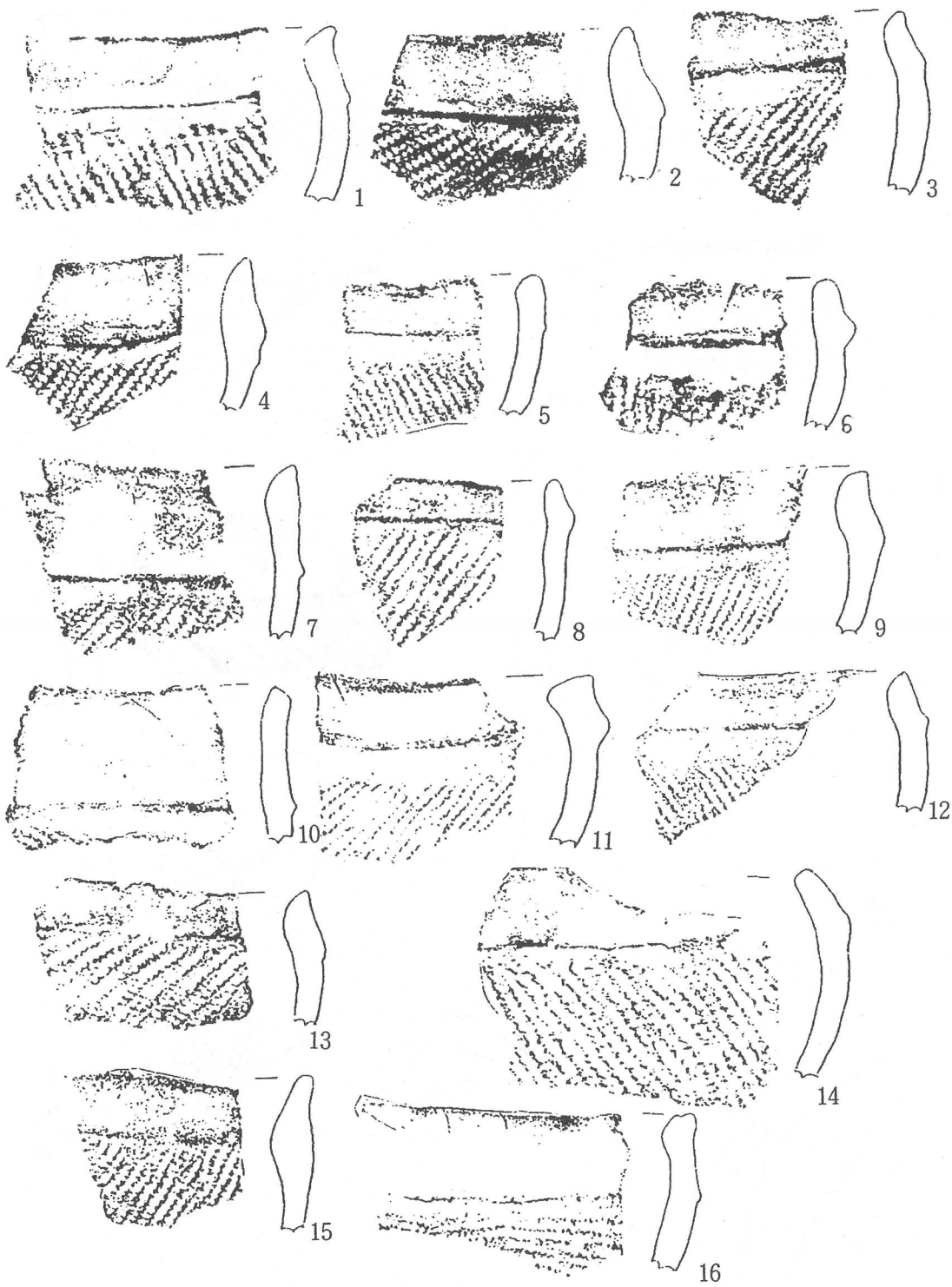
第6図 把手実測図



第6図 縄文土器底部破片実測図

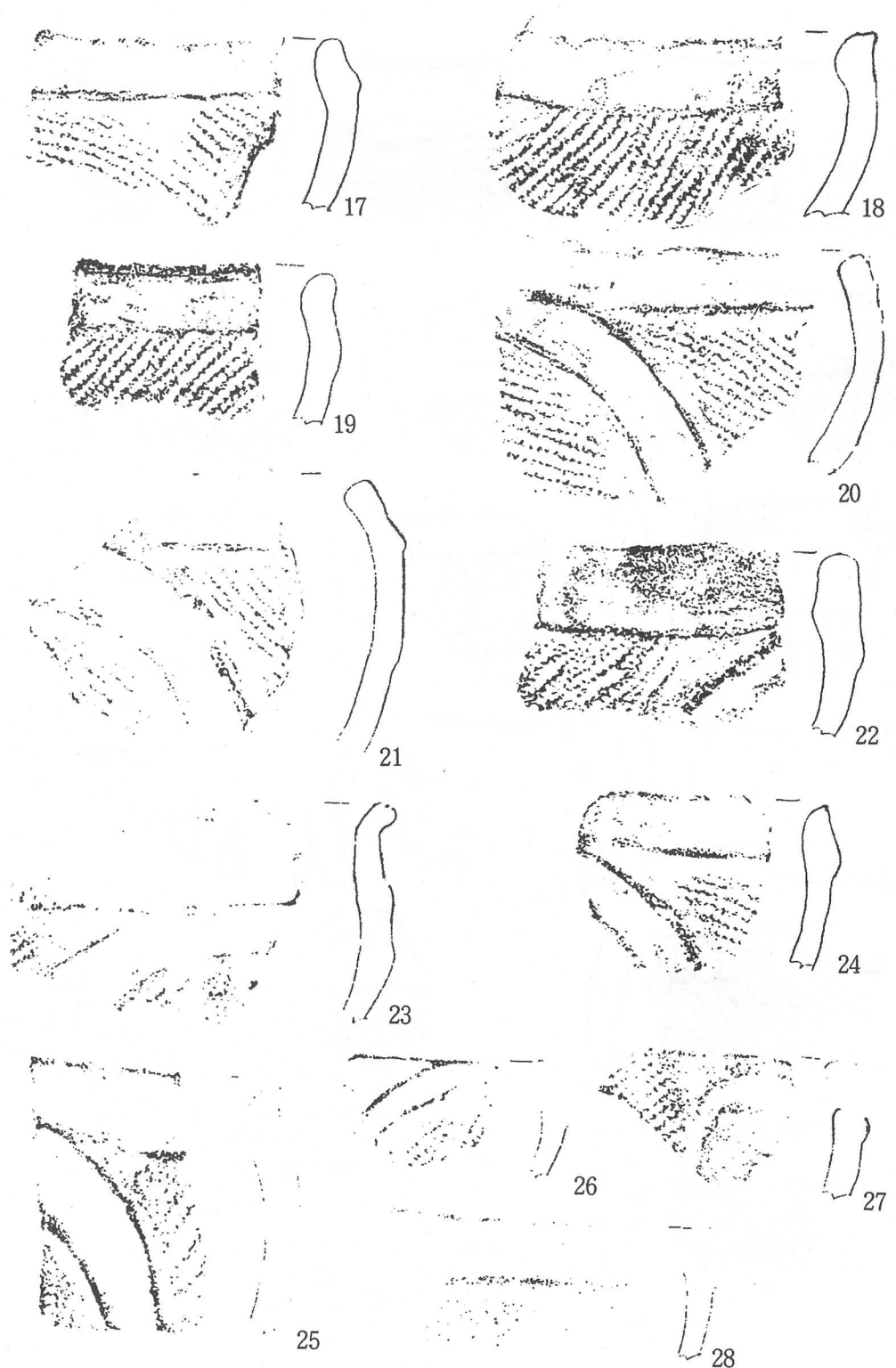


第7図 土製円板拓影図



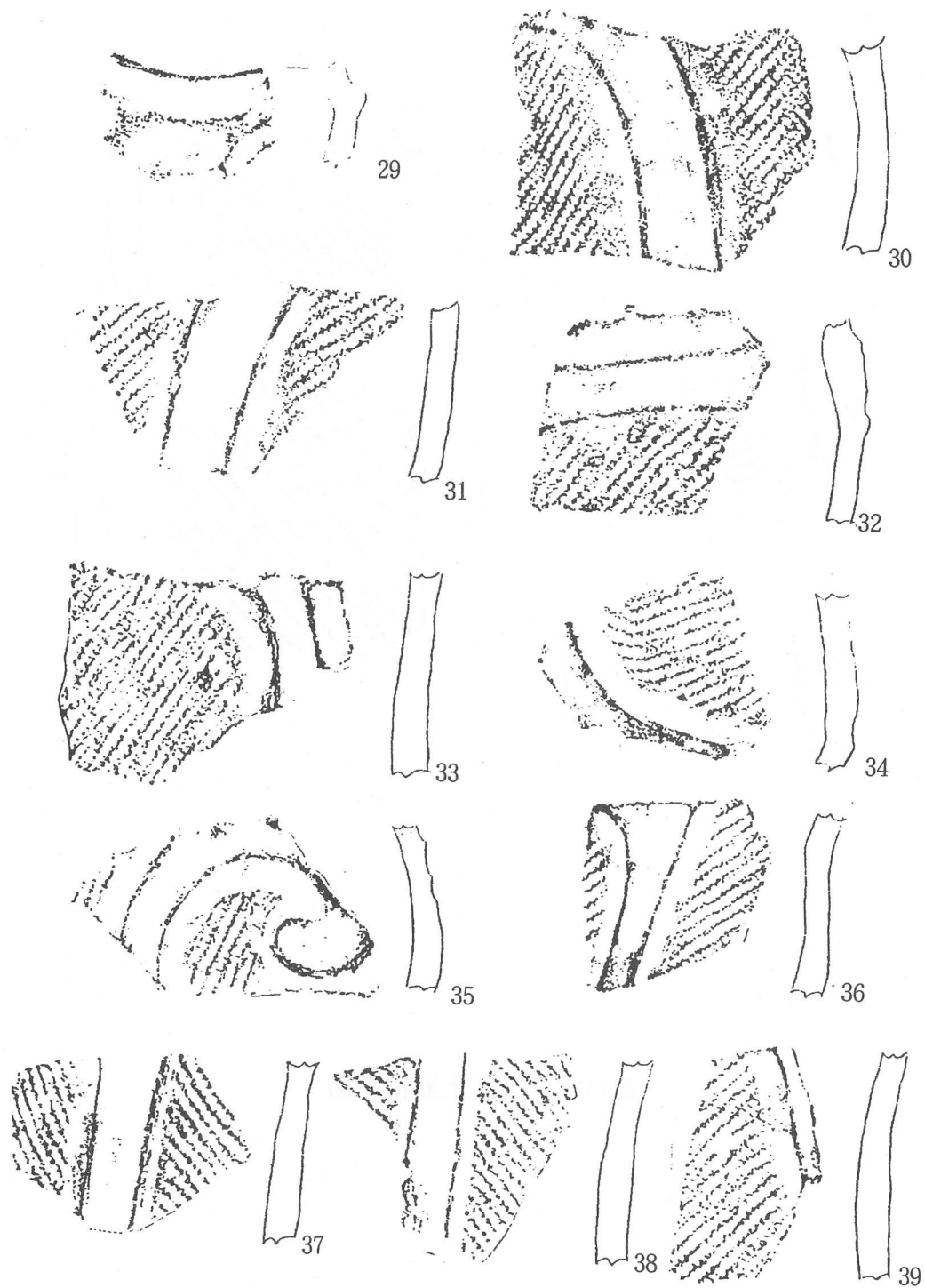
第8图 出土土器拓影图

0 10cm



第10图 出土土器拓影图

0 10cm



第9图 出土土器拓影图



第11图 出土土器拓影图

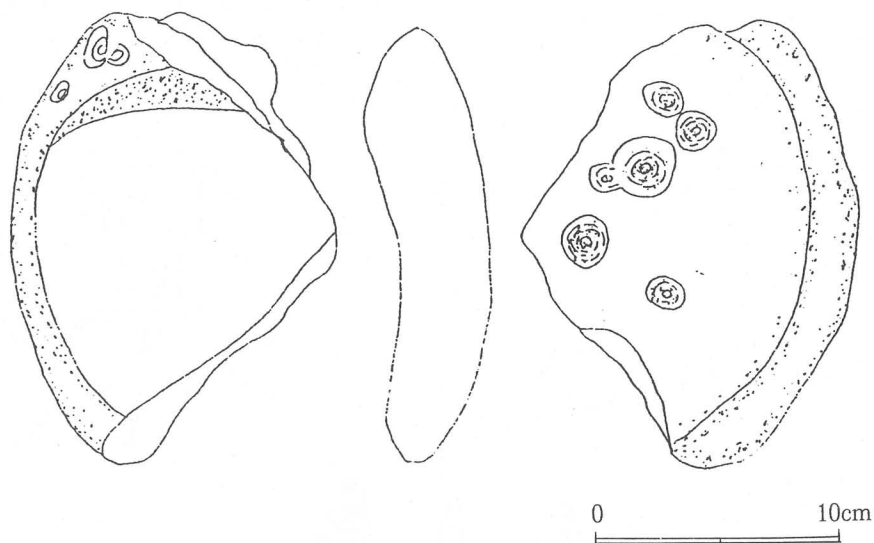
(2) 石 器

本調査において出土したものは、石鏃・石斧・磨石・敲石・石皿等であるが、その数は少ない。

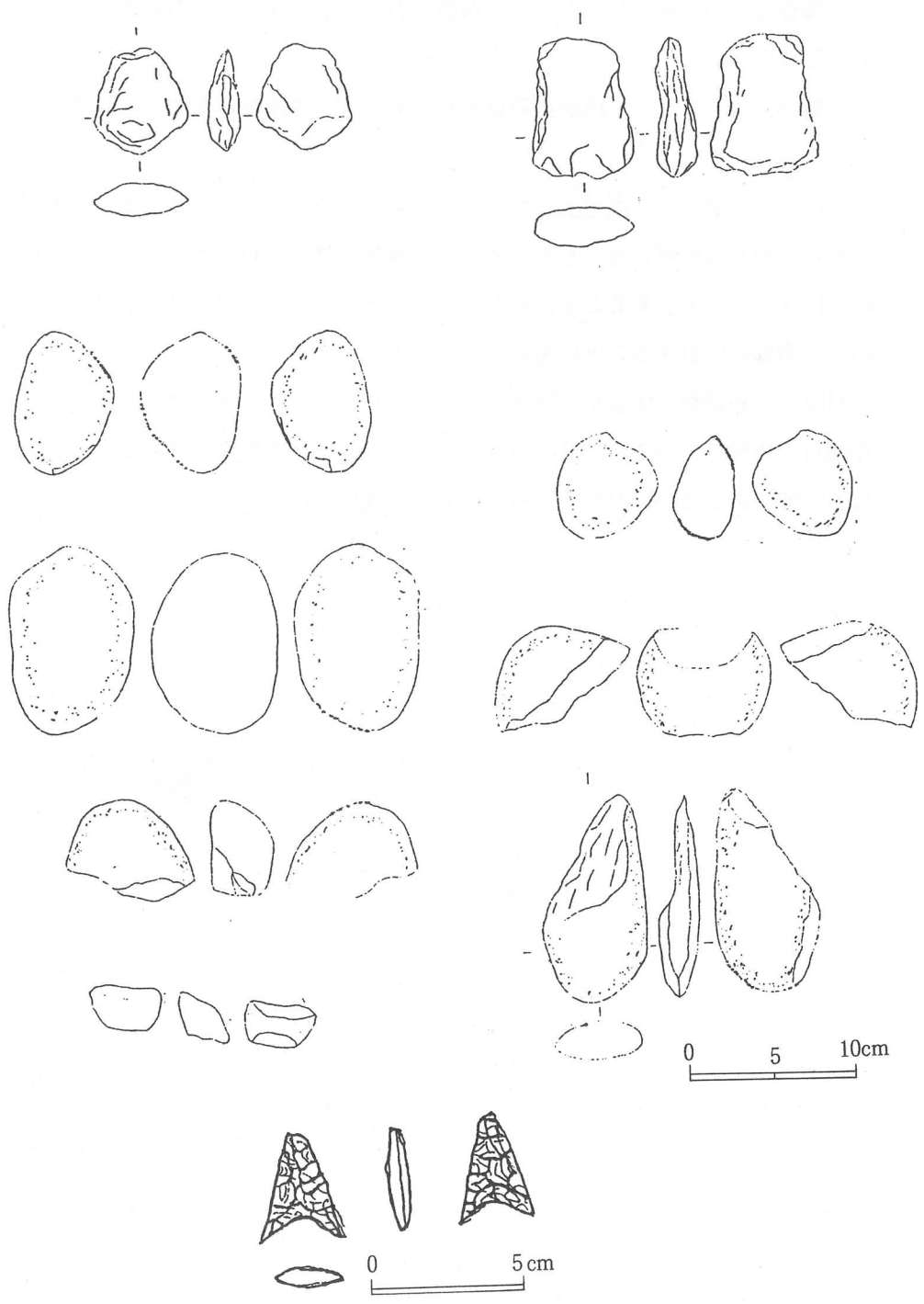
石鏃は、第1トレンチ内から発見されたもので、先端部が欠損した無茎のもの1点である。

石斧は、打製石斧2点出土した。磨石・敲石は合わせて4点ほど出土したが、これらは相互に併用し合うものが多く、各複数の機能を有しているわけで、使用時の状況によって、あるときは磨石、または敲石として使用されたと考えられるので、明確に区分することは困難である。

石皿は、石組炉の床面から破損したもの1点出土した。裏面に凹みを有しており凹石と兼用している。凹石の用途については、木の実類の殻割り用とか、発火具の一種であるとかいわれているが、その用途は不明である。



第12図 石皿実測図



第13図 石斧・磨石・敲石・石鏃実測図

む す び

今回の調査は、個人の住宅建築に伴う開発行為という特殊事情による、緊急調査である。そのうえ調査面積も小さく、調査期間にも制限がある状況なので、遺跡全体の性格を把握するのは不可能に等しく、本調査地点を中心にした範囲での状況報告である。

前述したように、竪穴住居跡の関連遺構である「石組炉」一基が確認された。また縄文中期の土器破片が多く伴出したことによって、縄文期の集落跡の一遺構と認められるが、橋爪遺跡の集落の主体は涸沼川に面した台地辺縁区域に存在すると考えられる。

いづれにしても、橋爪台地一帯には縄文時代の人々が、自然の恵みをうけて、採取狩猟の生活を営んでいたことであろう。

とくに、「石組炉」が完全な形で検出されたことは、本調査の成果である。

以 上

橋爪遺跡A地点 (原遺跡)

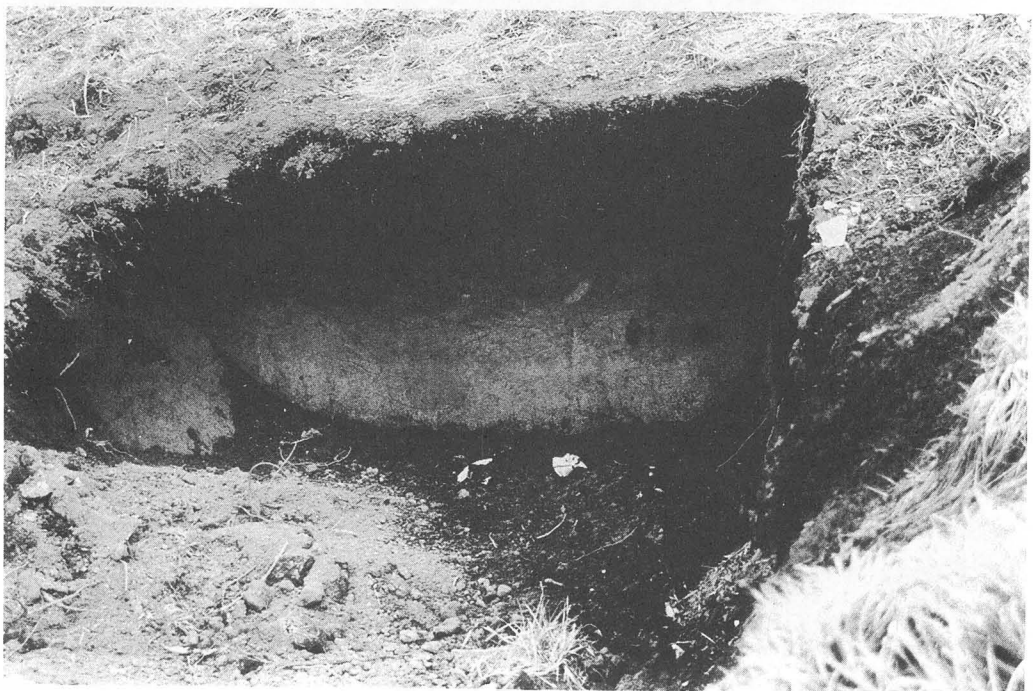
写真図版

- ・調査風景
- ・遺構と遺物

写真図板



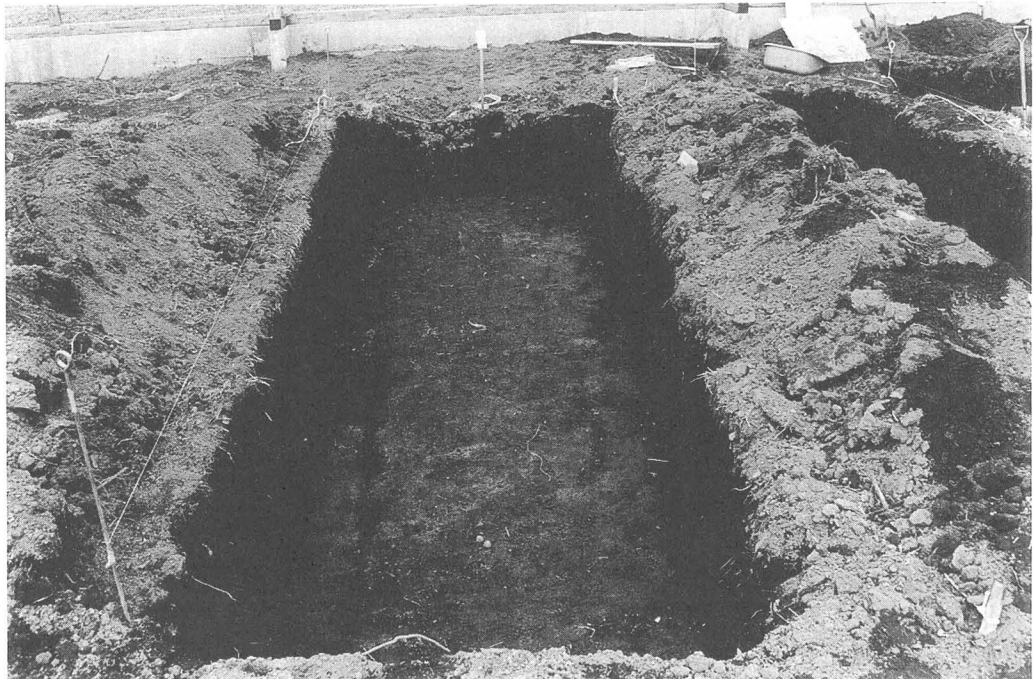
調査前の遺跡



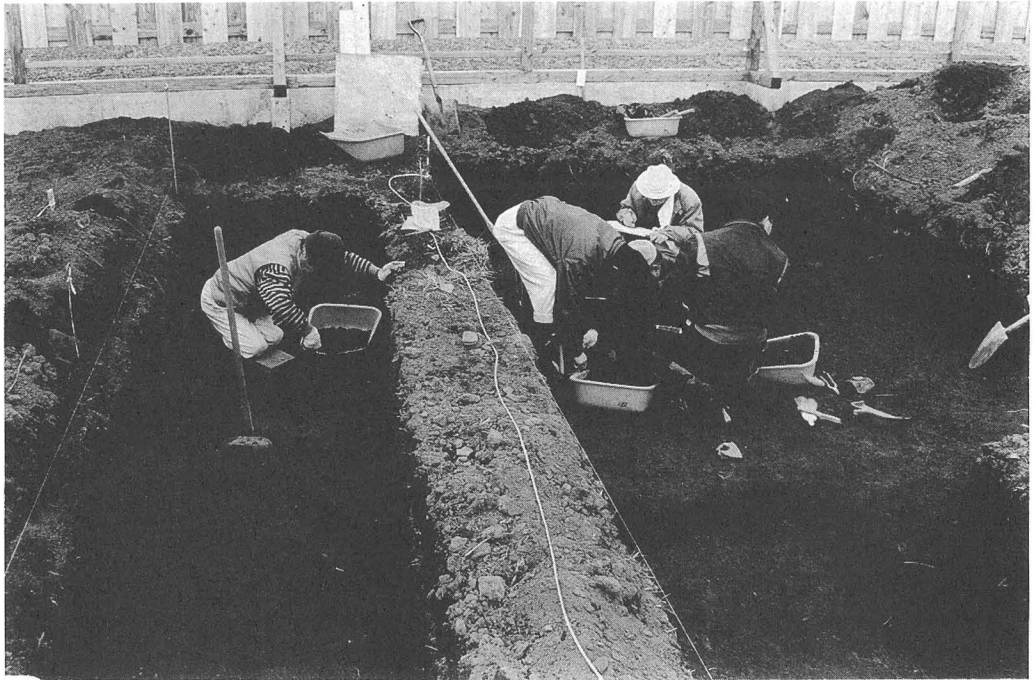
基本土層



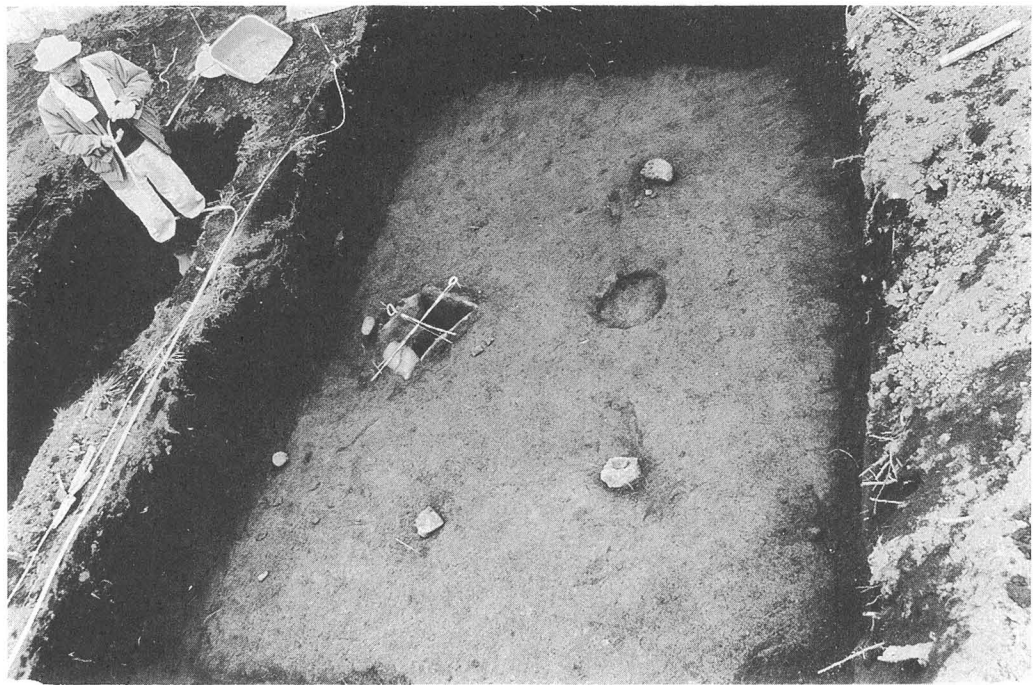
トレンチ内の除土作業



除土後のトレンチ



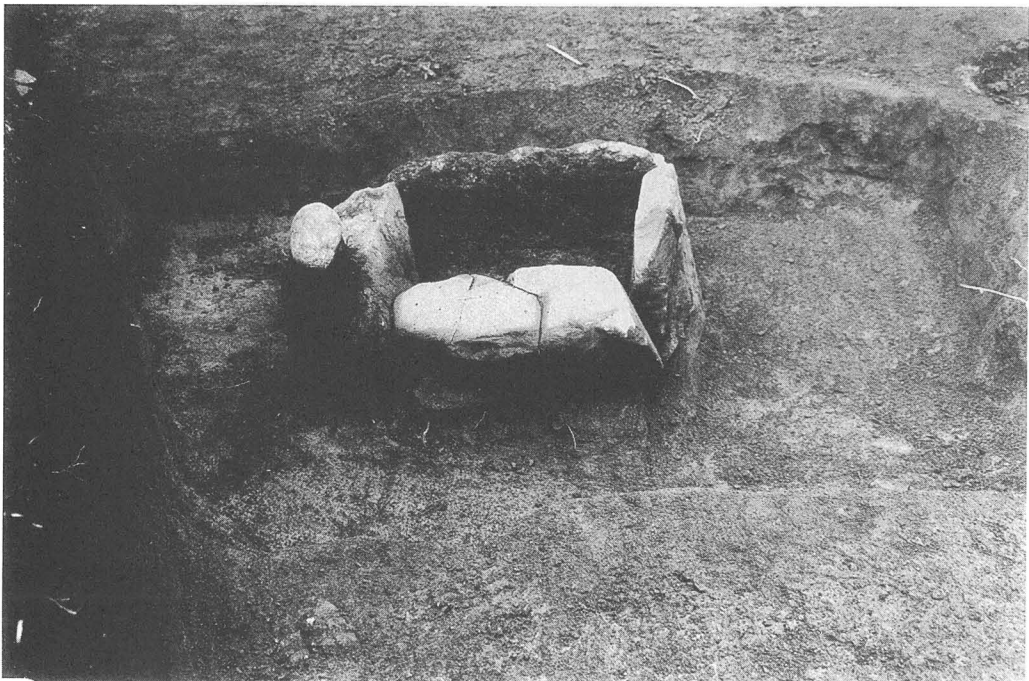
遺構の確認



石組炉と遺物出土



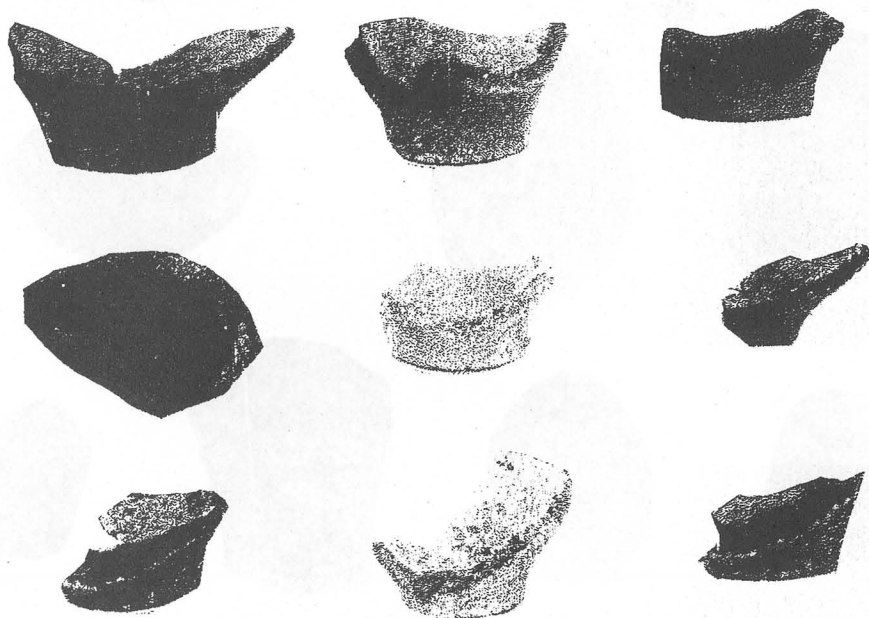
土 層 の 実 測



石 組 炉



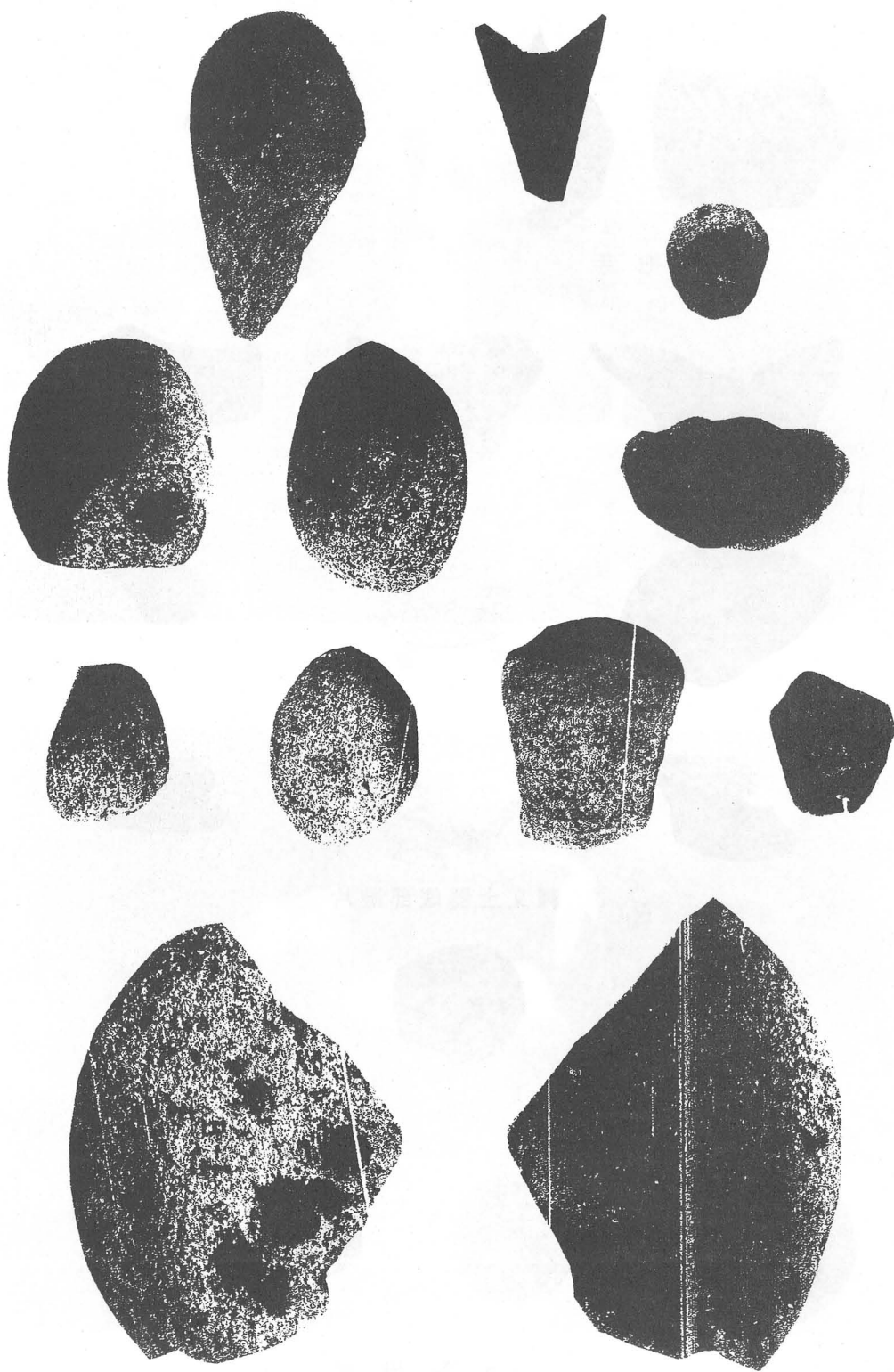
把手



繩文土器底部破片



土製円板



石器（石皿・石斧・磨石・敲石・石鏃）

